

空



2017・1

SORA 70号

太宰府 西住三恵子

水吹いて草鞋きりりと冬遍路
うしろ手に閉めし障子の日ざしかな
天山のふつくらとして小春かな
稜線に雲育ちをり冬暖か
看板の書体の気宇や冬青空

福岡 白水良子

窯元の景はよく似て初しぐれ
山葡萄マリア像へと蔓のぼす
海霧深くなる沖の島を遙拝す
鶏頭の頭が今日も叩かれる
湯ぶねに目閉ぢて更なる虫の声

大阪 井上和子

昼月や飛蝗の跳ぬる能舞台
爽涼や榎の木天を展きたる
禊場の朱の欄干や秋早
欄干の擬宝珠の傷み雁のこゑ
毛氈の野点の茶釜萩日和

兵庫 青木朋子

天を向く眼の跡や蛇の殻
蛇の殻真直に道を塞ぎけり
朝まだき破れ繕ふ女郎蜘蛛
蜘蛛の囿の七周毎の大隙間
電線へ蜘蛛の大網幾重にも

福岡 樋口みのぶ

秋めくや納屋の奥まで日の射して

医学書に付箋あまたや寒に入る

寒菊の供ふる丈に伸びてきし

重陽や折り目正しく日章旗

秋澄むや真白き画布を海に向け

福岡 亀井紀子

順々に括られてゆく猪の足

区区の値札なりけり柿の里

松茸をはこぶ仲居の白き足袋

忘年会終はりて一人また独り

病人に合はせる日々や蕪汁

兵庫 森俊人

病室へ廊下づたひに昼の虫

手術後の話などして十三夜

蔓たぐり白雲ひとつ浮かみゐる

ゆくりなく肩のツボ打つ木の実かな

また一つ交りの減り秋の雲

北海道 押田裕見子

子の付けし傷ある机洗ひをり

後ろ手に佇む漢刈田あと

二煎目も匂へる新茶朝の卓

竈もつ男へ持たす今年米

小刀で削る鉛筆文化の日

東京 遠山のり子

石垣の崩れし城址木の葉舞ふ

寄鍋や話つきねどお開きに

罌に逆らひきれぬ鴉かな

舞ふ枯葉森の鴉がまた騒ぐ

花野行くときどき花に触れながら



空作品抄
柴田佐知子抽出

川幅を広げ舟ゆく良夜かな

秋風に聞いて忘れて話し話かな

言ひたきは言ひ難きこと遠花火

まつろはぬ城は滅びて芒原

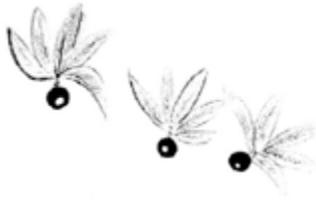


高倉和子

岸洋子

角野良生

深川淑枝



蒸し諸ゆつくり老いてゆくつもり

二百十日魚は焼かれて口開く

子の寢息聞こゆる毛糸編みにけり

畦道の闇に踏み込む虫送り

枇杷の花あてにせずとは失礼な

削られて台地となりし山眠る

リング割る力失せたる齢かな

地獄より湧き出て曼珠沙華の列

菊の日の太鼓とどろく揮毫会

鯖雲を引つ張つて汽車走りけり

唐辛子魔除けのごとく吊られをり

空中に吊りさげられし鷹柱

燈火親し学べば知らぬことの増え

中田みなみ

戸栗末廣

あさなが捷

松田明子

河原敬子

曾根富久恵

小島翠波

石橋幾代

田中とし江

小林朱夏

山内碧

千波悠

永淵恵子

四本の脚で駆けたき大花野

天谷翔子

糲殻焼く煙に夫を奪はるる

原友子

初恋を夫には秘してソーダ水

吉田悦子

萱を刈る老人一人雲一ら

田坂能雄

言はぬゆゑ伝はることも水引草

仲里奈央

まだ裂けぬ線の灰かに遭草の実

三井所美智子

甕棺の継ぎ目確かや雁渡る

矢野百合子

白桔梗墨の香残る部屋に挿す

窪みち子

おほかたは聞きのがす耳秋の風

吉田 菫

冬滝に濡れ初めしより道険し

西住三恵子

村中の老いてゐるなり鴉の贅

山本則男

阿蘇山の噴火に芒揺らぎゐる

秋 千晴

男気の溢るるをんな鶏頭花

田岡千章



打つ手無き碁盤に秋日差しにけり

林 徹也

梵鐘の音伸びてゆく紅葉山

白 水 良 子

柿熟るる男は褒めて使ふべし

苑 実 耶

柿挽ぎてしまひし空の青さかな

田 代 貞 香

灯点りて淋しくなりし夜店かな

大 西 の り 子

神楽笛大蛇自在に操りぬ

宮 井 知 英

峰雲やA4ほどのベビー服

え とう 樹 里

秋惜しむ墨一色の月の軸

田 代 民 子

ジーンズの膝より甲虫はがす

織 田 高 暢

父となる男の腕雪を搔く

押 田 裕 見 子

大西日牛井店の紅生姜

荻 悠 子

高原の霧降る中の停留所

山 田 正 子

萩こぼる瘦せし門掛けたれば

今 井 春 生

夕暮や秋明菊が浮き上がり

清水量子

托鉢の霧の浅瀬を渡りたる

瀬尾速水

咳きこみて身をちぢめたる句会かな

野畑さゆり

山頂に小さな祠返り花

横田敬子

しぐるるや線路を刻む貨車の音

田邊豊子

掛稻のながながと日のゆきわたる

田口萬智子

会話なき二人暮しや小夜時雨

立花一枝

行く秋の海底駅に降り立ちぬ

わたなべ漣

唐黍を丸ごと食ふ馬鼻曲げて

本多トミ

ゆく夏の白き雲より詠の来る

森俊人

秋晴や草木虫魚に声を掛け

青木朋子

掬はれぬやうに金魚は群れなさず

井上和子

犬連れて秋の夜風をポストまで

岩井京子



廃線のまくら木踏めば秋の風

鈴虫や居場所つかめぬ耳となり

木の椅子のこの風が好き小鳥来る

丹波路の色もかほりも栗の飯

町挙げて敬老会や吾れ九十

うたた寝に佳き小春日の暈の間

一人児に大人六人の運動会

秋声や父の夢見て目覚めをり

晴天や怠けてゐたる鴨ばかり

むかご煎る香りのなかに妣の顔

村上典子

田中素直

遠山のり子

桐山甫

三輪敏夫

日高孝

村上二三

植田洋子

森真二

川崎よしみ

空作品評

柴田佐知子

秋風に聞いて忘れし話かな

岸 洋子

ただ忘れたと言っているだけである。しかし読後には寂寥たる空間が広がってくる。もし季語が「春風」であつたらどうであろう。全く異なつた何とも暢気な作品になる。このように季語の取り合わせによつて伝えられる情感は大きく異なってくる。思いは一切もらしていない。選択された季語の「秋風に」に語らせた上質の一句。季語が幾重にも働き、歳を重ねていくことの寂寥感をも感じさせる。

季語には、四季の移ろいの中で磨かれてきた日本人の豊かな感覚が詰まっていると思う。このような力をもつた季語を生かさなくてはもつたたいない。自らの感覚を研ぎ澄まして季語を取り合わせたいものである。

言ひたきは言ひ難きこと遠花火
言はぬゆゑ伝はることも水引草

角野 良生
仲里 奈央

どちらも目を伏せたような作品である。一句目、言えば相手を傷付けるようなことがあるのかもしれない。鬱屈した心情に遠花火の音が届く。二句目、へ水引草」によつてもたらされたのである。瑞々しい青春性を感じられる。

蒸し諸ゆつくり老いてゆくつもり 中田みなみ

「古い」を詠みながら軽やかである。多くの人を惹きつけるみなみさんの明るい人間性が見えてくる作品で。

リンゴ割る力失せたる齢かな
村中の老いてゐるなり鴉の糞 小島 翠波
山本 則男

一句目、〈齢かな〉という押さえかたに思い切りのいい独自性が見られる。

二句目、〈村中の〉というオーバーな表現と、過疎化が進む村の全景から一気に一点に絞つた〈鴉の糞〉との取り合わせがいい。

このように老い一つを詠んでもそれぞれに自在である。〈以下略〉

空集

柴田佐知子選



川幅を広げ舟ゆく良夜かな
芒原迷へば母に会へさうな
殻少し残つてゐたる鴟の贅
灯の消えて裾の伸びゆく菊人形
揺るるものばかり身につけ七五三
焼芋の新聞紙まで香ばしく
戸口まで闇のつまりし霜夜かな

福岡 高倉和子

瓢箪の強きくびれや朝の地震
投入れのすすきかるかや明日は明日
食卓の脚に届く陽冬隣
秋風に聞いて忘れし話かな
虫の夜年々若くなる遺影
小六月明日飲む葉揃へけり
そぞろ寒すべて加齢にまとめらる
二人まだ敬語の仲や花火の夜
言ひたきは言ひ難きこと遠花火
親芋に子芋孫芋あるはあるは
田の力抜けてゆくなり落し水
ひまはりに後姿のありにけり
新米やともあれ卵かけご飯
案山子立つ虚仮の一念ありて立つ
遙かまで嶺々の浮波鷹渡る
渡りゆく空も荒野やもろがへり

福岡 岸 洋子
北九州 深川淑枝